

戦後における昭和天皇の短歌—その政治的メッセージとは(一)

近現代において、天皇の短歌に政治的メッセージが潜んでいることは、たびたび触れてきた。1945年8月以降の昭和天皇の短歌作品が日本の戦後政治史とどのような関係を持ったかをたどりたい。天皇の数少ない直接的な発信手段とみなされる「短歌」がその時々政治権力とどのように呼応しあったのかについて考えることになる。昭和天皇の短歌を読むには、生前に刊行された、天皇の歌集『みやまきりしま』（毎日新聞社 一九五一年）、天皇・皇后の合同歌集『あけぼの集』（読売新聞社 一九七四年）『昭和の御製集成』（毎日新聞社 一九八七年）がある。

昭和天皇の短歌は、公表されたものをふくめて没後に『おほうなばら』（宮内庁侍従職編 読売新聞社 一九九〇年）に集大成されており、その歌数八六五首である。そのうち、一九二一年（大正一〇）以降一九四五年八月までの敗戦前の作品は、毎年歌会始の作品だけの二四首にすぎない。歌集収録のほとんどが敗戦後の作品である。実際に、昭和天皇が何首の短歌を残したかはさだかではない。

敗戦前の昭和天皇の短歌を評して、岡野弘彦は、「調べと内容の大きさが自然に象徴性を感じさせる」伝統的な歌風と「常に世を思い民を思う」「幽暗で晦冥な感じ」を指摘する。敗戦後の短歌については、「明るく力強く」「大柄な風景の中に繊細な心の動きがからまって」いるといった解説をしている。また、加藤克巳は、「おおらかで、しずかに澄んで、あたたかい人の心というものが素直に表現されている」と評し、「おおらか」「あたたかい」「すがしい」「澄んでいる」などの批評語が定着しているようである。

一方、昭和天皇は自身の作歌態度について「私はできるだけ気持ちを率直に表したいと思っているが、そういう精神で歌をこれからも勉強したい」と述べている。

新憲法下の昭和天皇の短歌は、通常、新聞を通じて年二回発表される。一月一日新聞において天皇一家の写真や近況とともに、旧年の作品が、天皇、皇后ともども数首ずつ発表される。さらに、歌会始当日の各紙の夕刊には歌会始の一首が、他の皇族、召人、選者、入選者の作品とともに報道される。

では、まず昭和天皇の作品を遡り、発表当時の背景とその後の読まれ方ないし政治的利用の経緯を探ってみよう。

一. 天皇の歌が山形「県民の歌」に

① 広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけ

（一九二六年歌会始「河水清」）

大正期の摂政時代最後の作品である。山形県提供の資料によれば、「昭和五年にたって、宮内庁の許可を得て、東京音楽学校の島崎赤太郎教授が作曲し、以来、県民に親しまれてきている。昭和五七年三月三十一日『県民の歌』に制定した」とあり、戦前は県内の小・中学校で歌われたという。ここで注目しなければならないのは、この作品が県民の歌「最上川」として制定されたのが、まさに昭和晩年にあたる一九八二年だったという事実である。その年は、前年より教科書問題や閣僚の靖国神社参拝が大きくクローズアップされた年でもあった。

大正期の歌会始の一首に曲がつけられ、学校教育の現場で歌われてきたという戦前期からの定着、それが昭和晩年に「県民の歌」となった推移は、「御製」一首が初めて公表されたときの意味と背景を超えて、後年、異なる利用のされ方がなされた例ではないだろうか。

（『ポトナム』2007年2月号）